

<家庭教育フォーラム 講演会>

テーマ「優しい心とがんばる力」

平成23(2011)年7月10日(日)

大手前大学現代社会学部 なかの 仲野 よしえ 好重 教授

家庭教育フォーラム

主催：西宮市家庭教育振興市民会議 西宮市教育委員会



(講師プロフィール)

主な公職歴

- ・西宮市家庭教育振興市民会議委員
- ・尼崎市教育委員長（～2011年3月）

大学で教鞭をとる傍ら、年間100本近くの講演会を実施。講演テーマは、メンタルヘルスや日常生活に根ざした心理学など、さわやかな語り口とユーモアで、わかりやすい解説で定評。またおおらか且つ温かい人柄で世代を超えた広範な支持を得ている。

家庭教育振興市民会議と教育委員会は、共催で、アクタ東館の大学交流センターにて、「家庭教育フォーラム」を開催しました。

「優しい」とは何か？

まず「育てよう優しい心とがんばる力」の「優しい」とは何かを考えていただきたいと思います。私は25年前から約5年間日本とアメリカを往復して、両国の人口と状況が似ている街の4、5歳の子どもがいる家庭に対し、「あなたの子どもは、将来どんな人になって欲しいか」と尋ねました。するとアメリカ人は、「リーダーシップを取れる子ども」「人の中心になって、自分の言葉で語れて、人を説得できる人」と回答する方が多かったのです。それに対し日本の母親の願

いは、ほとんど「優しい子になって欲しい」です。1、2年前にも幼稚園のお母さん方に同じ質問をすると、回答は同じでした。20～25年経っても、日本人の願いは、わが子は優しい子どもに育てて欲しいなのです。ではこの「優しさ」って何でしょうか？自らの意思を表明せず相手にへらへらしたり、耳触りの良いことを言うことが「優しさ」ではありません。母親にとって、子どもに対する「優しさ」とは、何でしょうか。

それは、子どもの成長を願い、その成長のために自分は何ができるか。それを一生懸命に考える。考え続ける意思。それが「優しさ」ではないのでしょうか。ですから「優しさ」とは意思です。

そうであるならば、「優しさ」には練習が必要

となります。天井から「棚ぼた」のように降ってくるようなものではありません。では、どのような練習が必要なのでしょう。ソフトに言いますと、実は「優しさ」の根本は「愛」です。しかし、もはや家庭で「愛してるよ」とは言わなくなりつつあります。なぜなら愛情の裏返しで厳しく論し、叱り、導いているからです。「愛」の根本は、自分の持つ命、時間です。時間は、未来であり、それは別の言葉で言いますと「心」です。しかし「心」である時間には、二つの使い方があります。人のためと自分のため。人のために時間を使うこと。この根本も「愛」です。「優しさ」がなくてはできません。意思力がなくては出来ません。「愛」とは、自己を受け入れる、自分を受け入れる、自分を認める、もっと成長したいと自分自身に願う気持ちを持つ、それが自分に対しての「愛」です。自分を愛することができなければ、どうして人を愛せるのでしょうか。我が身にできないことは、人にはできません。「自分にできて、自分に実践して、自分が幸せです」と思うから、人にしてあげられるのです。「愛」も「優しさ」も同じです。

よって、「優しい心を育てる」には、何が必要かと言いますと、相当の意思力と実行力が必要です。そして自分以外の存在への深い思いが必要です。自分を受け止め、認め、更なる自分の成長を願う、そこから「愛」が始まるのです。

「がんばる力」とは

「がんばれ」という言葉ですが、私たちは、挨拶代わりに「がんばってね」とよく使います。その「がんばって」の言葉には、「さようなら」「また会おうね」「応援してるよ」「健康でね」という意味が全部入っています。この「がんばる力」に一番込められた思いは、少々のことではくじけない、強い思いを持ち続け、根気よく、困難を乗り越えて行こうとする底力。そういったものを

「がんばる力」に、込めているのではないかと思います。では、その底力などを身につけるには、どうすればいいのでしょうか。それは先ほどの「優しさ」とリンクするのです。最近よく使われる言葉に「自己肯定感を育てる」という言葉があります。これは、「自分は捨てたものではない」、「やればできる」、「自分という存在は大切だ」という思いを含む自分自身への信頼感の言葉です。究極的には、「愛」「優しさ」と同じで、「愛されている」とか、「大切に育てられた」とか、「自分の人生に何かの意味がある」、「自分の人生は生きるに値する」というような思いです。では、何が土台になるかと言えば、自分が大切にされてきた記憶、愛された記憶、頼りにされた記憶、尊重されてきた記憶、何かしてできたという記憶、そういうものと共に自分が寄って立つ人生の土台、踏ん張りどころの土台、それを持っているかどうかです。それが「がんばる力」です。

人生は、踏ん張らないとだめなんです。では、どうやって踏ん張らせるのか。それは経験です。踏ん張る力や我慢する力やここ一発やるぞという実行力は、経験からしか出てきません。言葉で聞き、なるほどと思っても、その人の体からみなぎる生きる力は、出てこないのです。しかし、わからないと感じていても、自ら体を動かす、体から入って来る、痛みを知る、喜びを知ることを経験した人は、自然と入ってくるのです。人が生きる意味を見出すことができるのは、人間だけなのです。無理やりにでも意味を作るのです。そして意味を見出した時、作り上げた時、生きていこうと思うのです。モノから勇氣はもらえないのです。人からもらうのです。私たちは、人間を通してしか人生の意味を見出すことはできないし、勇氣をもらえないし、前に進んで行くことはできないのです。ですから、家庭教育、学校教育、地域での教育の3つの教育は、すべて人間が介在します。

「自らを振り返る」

自分を受け入れて、そして自信を持った時、人は、「がんばる力」が出てきます。ということは「優しい心」を育てるのも「がんばる力」を育てるのも、表裏一体なのです。自分に優しくできない人が、人に優しくできるでしょうか。自分の人生の困難を乗り越えてやるぞという意思を持たない人は、「人を励まして乗り越えなさいよ」、「頑張りなさいよ」と言えるのでしょうか。すべては自分がもってきたものに由来します。では、どうやって育てるのか。私たちは愛することをしなければいけない。私たちは「優しさ」を見せなければならぬ。私たちは、文句ばかり言うのではなく、頑張る姿勢を見せなければいけない。何を子どもたちに期待し、信じ、願い、祈り続けているのでしょうか。私たちが自問すべき事柄です。いい子に育つために私たちは、いかに我々も心を砕き、心を使い、生きているか。それに真摯に向き合う時に、子どもたちにはその姿が見えているはず。声も届いているはず。よりよいものがこの子たちの心という土壌に種として蒔かれ、そして芽を出して、花を咲かすことを願い、信じることしかできません。

人生をあきらめてはいけません

今、現代社会に巣くう心の病は何かと言いますと、その一つは他者をモノ扱いして、拳句の果てに自分自身を蔑むような風潮です。どうせ頑張らなくて就職活動しても無理だとか、行動する前からあきらめている若者がたくさんいます。何度もチャレンジする価値がある。自分にはその意味のある人生があるのだと信じて欲しい。

我と汝の関係

最後に、皆さんに届けたい言葉は、かつてブーバーという哲学者が言いました「本当の人間と人間の関係性は、我と汝の関係だ」ということです。我は私という意味で、汝は特定のあなたを呼びかける時の言葉です。汝とは一番丁寧な人、相手様を呼ぶ時の言葉です。すべての人間関係は、それが一期一会であっても、我と汝の関係なのです。でもブーバーは何十年も前に、最近の世の中は「我とそれ」の関係になっていると嘆いたのです。私たちには名前がある、一人ひとり大切な人生がある、一人ひとりの重要な関わりがある、私たちは、誰一人切り捨てられてはならないすばらしい存在なのです。ですので「それ」と扱われる時があります。何十年経っても世の中は変わっておらず、むしろひどくなっている。「あなた、そこにいる君、特定の人生を抱えた君だよ」とそういう呼びかけができる社会にしてほしい。そういった中で、子どもを育てたい。子どもたちには、自分も人のこともモノ扱いしないハートを持った子どもになって欲しい。それが本当の究極の「優しい心」ではないでしょうか。それを維持して意思力を持つ、それが「がんばる力」に繋がっています。子どもたちは、与えられたもののみ人に与えることができます。見聞きしたことからしか話しません。だから、たくさん子どもたちに与えるのです。人生の経験も頑張りどころも苦しいことも、つまらないことも、退屈することも、ありとあらゆる世の中の事象を与えるべきです。そして、悩むことも大事です。喜ぶことも大事です。笑顔も大事ですが、時には泣き顔も必要です。そういった経験が子どもの中でどんどん耕されていく中で、「優しい心とがんばる力」を持った子どもたちの実現にグッと近づいていくのではないかと考えています。

参加者の質問と回答

Q 子どもが食べ物のことでわがママを言ったので、「自分の家で十分に食べられることだけでも幸せじゃないの。世界では紛争が起きているところがあり、住むところもなく、食べるものもなく、そのような環境で生きている子どもたちがいる。今は震災が起き、困っている子どもたちがいて、その子どもも同じだよ。」と言いました。しかし、なかなかその言葉が子どもたちに伝わらなくて凄くもどかしいのです。親としてどう伝えていけばいいのか。自分の子どもは、自分のことで精一杯で、世界のことや震災で苦しんでいる子どもなどをなぜ思いやることができないのかなと思っています。

A そのような話を家庭で子どもさんにまっすぐ向き合ってなさっていることが、素晴らしいです。私は、「ずっと言い続けること」だと思っています。そう簡単に、「理解しているよ」と子どもは、言わないと思います。が、もうそのお子さんの心には思いが入っています。ですから、時間はかかりますが、待ってあげてください。お子さんは、自分に子どもができたときに、それがわかるのです。お母さんが涙が出るほど、魂が震えるほど思っていることが、子供に伝わらないことはありません。必ずそのお子さんは、自分の子に言います。あきらめないでください。

家庭教育は **不 易 流 行**

学校の先生は、子どもたちの宿題ノートの点検をした後に「よくできました」のハンコを押したり、シールを貼ったりします。

私も教師時代、いろんな表現や方法で、子どもたちに返したのですが、一番反響が大きかったのが「不易流行」の角印でした。少し古い角印ですが、子どもたちにはカッコよく見えたのでしょう。

「^{ふえきりゅうこう}不易流行」⇒「(不易) 変わらないものと、(流行) 移り変わるものは、根本では同じである」という教えです。

西宮市家庭教育振興市民会議では、この度「5つの実践目標」を新たに提唱しました。昭和58年に提唱した実践目標も「家庭教育の基本」(不易)であると思いますし、今後もまた時代の変化に即し、表現に変化(流行)があ

るかもしれません。しかし、時代がどんなに変わろうとも家庭教育や子育ての基本は、ここにある。そんな実践目標を私たちは改めてここに提唱します。

(家庭教育振興市民会議議長 仲島正教)

5つの実践目標

- ★育てよう 優しい心と がんばる力
- ★声かけよう おはよう ありがとう
ごめんなさい
- ★見守ろう よその子 我が子
区別なく
- ★習慣づけよう 早寝 早起き
朝ごはん
- ★外に出よう 元気に遊んで
友だちいっぱい